

## アフリカの人々と名付け 4

### 死を叙する名前と、死をやり過ごす名前

小馬 徹

アフリカの名前には、日本に類例を見ないものが幾つかある。これから命名しようとする赤ん坊が遠からず死ぬことを叙する名前なども、それを耳にすればハッと胸を突かれる。

#### 死よ、奢るなかれ！

西ウガンダに住むバントゥ語系の農耕民であるニョロ人は、そのような名前を数多く持っている〔Beattie, J.H.M. “Nyoro Personal Names, *The Uganda Journal*, 21(1), 1957〕。

直接死に言及するものでは、「死は鳥のように啄む」（鳥は気儘に、しかし真っ直ぐに地上の穀粒の一つを選んで啄む。次が誰の番か知る由もない）、「死は自ら楽しむ」（死は子供を少し大きく美しく育てておいてから徐に襲う）、「死には分別も理解もない」（例えば、死は往々老人ではなく年端もいかない子供を捕らえる）、「死の物」、「死の（好物である）肉」などがある。

まるで謎々のように「死は何処に行った」という名前と、その答えとしての「死はまだここにいる」という名前さえも存在する。

「悲しみ」の語で赤ん坊の死を示唆するのは、次のような名前だ。「悲しみはまだ終わらない」、「胎が悲しみをもたらす」（懐妊は両親に悲しみをもたらす。子供はすぐに死ぬのだから）、「悲しみが増える」（他の子は死んだ。この子も死ぬであろう）、「悲しみがまた沸き上がった」（新生児が先に子が死んだ

悲しみを新たに思い起こさせた）。

「一日」（一日ももつまい）、「明日死ぬだろう」、「何のの役にたつ？」（大きくなる前に死ぬだろうから）、「子は得ならず」（他の子供たちは死んだ。この子も……）などの名前にも、人々の深い悲しみが宿っている。

#### テンボ人の「叙死名」

ウガンダとザイールの国境を跨いで住むルグバラ人の間にも、「（生まれれば）死がまちうけるはず」（母親は不幸だ。ただ赤ん坊の死を待つばかりだもの）、「死の家に」（最近親族の子供たちが沢山死んだ）など、類似の「叙死名」が見られる。〔Middleton, J., “The Social Significance of Lugubara”, *The Uganda Journal*, (25)1, 1961〕。

梶茂樹自身は「叙死名」の分類を立てていないが、ザイールのテンボ人の間にも幾つかこの種の名前を見いだすことができそうだ。

「すぐに死ぬ子」（私の家では全ては朽ちる。今まで多くの子供を死なせてきたからどうせこの子もすぐに死ぬだろう）、「悪いもの」（虚弱体質の子。「どうせそのうち死ぬと思ったとき母親が付ける」）、「皮製の物入れ」（同：皮は肉・骨と比べれば無価値）、「我々は不幸な目にあってきた」（この子の兄弟が沢山死んだ）、「切ったあとに生えてきた枝」（同）〔「テンボ族における個人名」『季刊人類学』16(1), 1985〕。

死を叙するのか、やり過ごすのか

梶の報告は、一つの議論を生んだ。小川は、梶の二つの論文へのコメントで、これらの「名前の説明において、生まれた子が長生きするようにという母親の切なる思いなどはいっさい感じられない。『どうせ』という言葉からすると、母親は近い将来におけるわが子の死を予測しているかのごとくである」と、かなり強い疑問を呈している〔「コメント」、『季刊人類学』16(2), 1985〕。

小川は、「どうせ死ぬだろうという直截なものではなく、このような名をつけることによって死に神の裏をかく意がかくされているのではなからうか」と述べ、セネガルのフルベ人の命名慣行を参照する〔前掲書〕。

フルベ人の「神をやり過ごす」命名

フルベには、先の子供が死んだ後に生まれた子供の息災を直截に願う、次のような名前がある〔小川『サヘルに暮らす』1987〕。「生きている」、「長生きする者」、「(何時も)ここにいる」、「祝福された者」、「捨てられない」、「死なないだろう」、「老人」(になるまで生きよ)。

一方、同じカテゴリーの名でも、親の切なる思いが屈折した形で表現される名前もある。「憎まれ者」、「拒否された者」、「名前がない」などがそれである。その裏には「死に神に『憎まれ』、『拒否』されることによって無事に生きてゆけるように」、また『「名なし」と名付けることによって、あたかもその子が存在しないようによそおう」という思いが隠されていると小川は推測する。

さらに悲劇的な、つまり先に死んだ兄弟の名付け親までも死んでしまったという状況で生まれて来た子供に付けられる名前のカテゴ

リーもある——「西欧人」(特にフランス人)、「マダム」(フランス人の)、「オス牛」、「木製・瓢箪製容器のしつけ糸」など。

件の赤ん坊が異邦人である「西欧人」や「マダム」、さらには動物や物に過ぎない「オス牛」、「木製・瓢箪製容器のしつけ糸」に名付け親になってもらったと偽装して、同じ不幸の反復を回避する願いがこうした名前にはこめられていると言うのだ〔前掲書〕。

「屎」を付けた日本人の童名

すると、一見無縁だと思われたアフリカの「叙死名」が、わが国の古い慣行を想起させる。

平安時代以前には、押坂史家屎(おしさかのふひとけくそ)、倉臣小屎(くらのおみおぐそ)、阿部朝臣男屎(あべのあそみおぐそ)、ト部乙屎麿呂(うらとべのおとくそまろ)、巨勢朝臣屎子(こせのあそみくそこ)など、屎を冠した一群の名前があった〔曲亭馬琴『玄同放言』巻三、1820〕。

これらは、「実名」あるいは「烏帽子名」ではなく童名であったはずだ。紀貫之の童名も阿古久曾麿呂(あこくそまろ)であるが、麿呂は糞尿を排泄する意味の動詞「まる」の派生名詞である。実名は秘されたのだ。

魔を避けようと、童名には往々おぞましい名前が選ばれた。貴族は強い恐れ意識から自分を麿呂と呼び、やがて「まる」は丸の字を宛て、固有名詞の接尾辞として広く用いられる。この心意は、捨吉、捨造等の名前にも及ぶ。

さて問題は、はたして「除死名」が単に死をやり過ごす命名なのかということだ。

(こんま とおる 神奈川大学)